

二〇年一昔

森田徳忠

今から数えて丁度二〇年前の一九九〇年はカンボジアの四当事者（シアヌーク、ポルポト、ソンサン、フンセン各派）が和平案の骨組みに同意した記念すべき年である。そして翌一九九一年の和平協定調印により一九六〇年連続したインドシナ紛争に終止符が打たれた。一方いずれの日にかメコン地域から硝煙が消えることを期待しつつ、その時のあるべき姿を漠然とではあるが頭の中で温め始めたのは、タイとラオスがメコン川をはさんで時折砲火を交えていた一九八〇年代半の頃である。それはメコン六カ国が国境を越えて協力し合う事により、この地域を道路網・航空路線・送電線網などで物理的に結び、経済的・人的交流を盛んにする、そして地域全体の繁栄と安定をはかる、といういわばGMSの概略図程度のものであった。

その頃この考えに理解を示してくれたのが、当時のタイ副首相スノーさんと、タイとは敵対関係にあったラオス副首相カンパイさんの二人である。私にとって幸運だったのはスノーさんはこの地域を代表するインテリの一人であり、またカンパイさんはパテト・ラオの一員として、戦いに命を投げ出すことの恐ろしさや、小国が生き抜くことの難しさを身をもって体験した筋金入りの人であったことである。二人は平和の尊さと本当の意味の「国益」が何であるかを理解し、この試みに真正面から力を貸してくれた。メコンの国々はそれぞれ異なる体制下にあったが、その困難な環境の中で、彼等の知恵と勇気がGMSという卵を守ったことは疑いない。

カンボジアにGMS計画参加への呼びかけをした際に、四当事者の中で群を抜いた見識を示したのは当時一番若かったフンセン氏であった。曰く「GMS計画が実施されれば、この地域の国々は真の協力関係に入る。その時は軍事費の大幅削減が可能になり、これまで手が回らなかった農村開発にお金を使えるし、貧困にあえいでいる人達を助けることもできる」。平和協定結後であってもなおポルポト軍と戦い抜かねばならない彼の立場、貧しい財政の中から疲弊し切った農村に手を差し伸べたい心情、昨日まで敵同士だったインドシナ地域の安定を目指すGMS計画への期待を余すことなく言い表した一言であった。平和の意味を知る人ならではの言葉である。この時カンボジアの加入が決まりGMS構想が大きく前進した。二〇年前のことである。

当たり前のことだが、いかなるグループもバイラテラルの関係が先ず有って、その積み重ねで成り立っている。そして個々の関係を一つの集合体として纏め上げているのは、GMSの場合一枚の協定書ではない。それは彼等に共通する価値観とアジアの知恵であり、地域安定への願いである。幸いなことに我々もそれ等を共有し、また理解している。であるとすれば、後は我々がそれをGMS支援にあたってどう使うかという問題だけである。

（もりた のりただ／元アジア開発銀行プログラム局長）